

科学研究費成果報告書「日本近代史料に関する情報機関についての予備的研究」（基盤研究（B）（1）、平成9・10年度、研究代表伊藤隆、課題番号：09490005）より

6 櫻井 良樹氏

さくらい りょうじゅ 麗澤大学・外国語学部・助教授
日時 : 1998年4月3日
出席者：伊藤隆 伊藤光一 勝村哲也 季武嘉也 村瀬信一 梶田明宏
古川隆久 有山輝雄 武田知己

伊藤 自分の研究の過程で、一体どういうふうにして史料を発掘したり利用してきたかということで、史料についてお話いただくということなのですが、櫻井さんの場合、ホームページを持っていろいろおやりになっていらっしゃるということでもありますので、ちょっとそういうこともお話いただいてと思っております。では、お願いいたします。

櫻井 季武先生からお話をいただいたときに、いろんな文書とか史料とか、インターネットの話とか、知っていることをただ何でもいいから喋ってくれというような感じだったので、どう筋道をつけてお話しすればよいのか分からず非常に困っています。いざどういうふうの研究してきたと考えますと、なかなか思い出せませんので、思いつくまま話させていただきます。

自分の研究は非政友会系の政党史が主だと思っています。その観点からのものもありますし、又いろんなことから余儀なく様々な文書の出版に比較的多く関わってきたと思います。もちろん伊藤先生などにはとても遠く遠く及ばないわけで、大した人物のものはやっていませんけれども、かなりいろんなものをやってきたと思います。

それで文書という場合、いろんなレベルの文書があるように思うわけです。すでに本になってしまっているもの、目録だけ出ているもの、本にならずとも雑誌の中に史料の一部が掲載されたというものは結構あります。そういうものを一時期は網羅的に集めてやろうなどと思って目録を作りはじめたことがあったのですがけれども、関心のない文書がやはりありまして、たとえば、地方史のある地主の家の史料が掲載されても、当分使わないなという気になって止めてしまったことがありました。結局のところ作っていても自分の知っている範囲内でのということにしかありませんし、それ以上やるのはそれ専門にやらないと無理だということが分かりまして、殆ど最近では作っておりません。

それから、文書といっても書簡類中心のものから、パンフレット、小冊子中心の

もの、あるところでは、そういうものは図書館の蔵書として文庫として入っているようなものがありますから、この頃はその区別というのもあまり意味はないと思うようになってきました。結局のところ、自分の研究する関心にしたがって、その人の守備範囲に合うものしか個人的な文書目録はできないと思うようになりました。

プリントに、いくつか訪れたところと自分が関わった文書を書いておきました。大竹邸記念館というのは、大竹貫一という第2回の衆議院選挙から戦争直前までずっと衆議院議員を続けて……1回か2回落ちているかもしれませんが……いた人で、新潟県の非政友派の政治家なんですね。この史料館があるということ自体は人から聞いて15年前くらいに行きました。

記念館は中之島町にあります。信濃川改修関係のものが多くて、政治関係のものはあまり展示もしていなかったのですが、確か2階建てだったと思うんですが、その2階に上げていただいて、いろんな引き出しを見せていただいたところ、少し政治関係のものがあって、たとえば明治42年から3年頃の又新会の代議士会の会議録があったのです。それは以前に『紀尾井史学』（6号）という雑誌に発表しました。今は、そのままホームページの中に入れて公開しておりますので、そちらで見ることができますし、テキスト・データとしてコピーすることもできます。その他に予算案の問題とか、それから、彼は憲政会に入りますけれども、そこから脱会したときの脱会届けとか、いくつか政治関係のものもありました。

ここは新潟県史でも集中的に整理していないと思います。史料はたくさんあってそれなりに面白いところだと思いますが、やるとしたらたいへんだと思ってます。

伊藤 そこに紹介した以外のものもたくさんあるということですか。

櫻井 そうですね。目録もとってませんし。

伊藤 目録はなしですか。

櫻井 ええ。私が行ったときにはありませんでした。ただ、大竹という人物が非政友派においてはかなり有名な人物ですので、ちゃんと調べたら面白いとは思いますが。

伊藤 憲政記念館は行っているんじゃないですか。

伊藤（光） 私は何回か大竹には行ってます。戸棚の奥のほうにゴチャゴチャしまっていてありますから。ただ、あまり重要な書類はありませんでしたね。

櫻井 そうですね。信濃川はちゃんとやれば面白かったと思うんですけどね。

伊藤（光） ただ、見るのがたいへんで。

櫻井 週に1回か2回しか開いてませんしね。

次の蔵原惟郭の文書というのも、彼は明治時代に近衛篤磨と親しかった対外硬派の一人です。のちに衆議院議員になっていく人物です。蔵原惟人のお父さんということになりますが、本人は別に社会主義者ではありません。これも非政友派の日露

戦後の動きを見る過程で、たまたま宮地正人先生に紹介していただいて、東京大学史料編纂所でマイクロフィルムで見ました。あそこは維新までの文書を主な対象としていますから、当時は登録されていない形として所蔵されていたわけです。整理されたのは、坂野先生と宮地先生です。殆ど書簡だと思います。これは目録があつてカードになってまして、蔵原の特に非政友派の人とのつながりを調べるのに使いました。

伊藤 これはカードだけですか。

櫻井 ええ。カードになっていてマイクロで見られます。冊子体にはなっていないです。いまは史料編纂所に正式に登録されており紹介無しに見られるんじゃないかと思っています。

次が木堂記念館です。ここはその後、随分と整理されてきたんですけども、僕が行ったときは20年近く前になりますから、まだまだちゃんとしていなかった時期です。そのときにいろんな史料があったんですが、来簡に中国関係の人のものもあって、それはその後何かに紹介されたようです。

伊藤（光） そのようですね。

櫻井 秋田の鷺尾家（鷺尾義直）からもってきたものだと思いますけれども。

伊藤 鷺尾家のものでしょう。

櫻井 ええ。それがあつて見に行ったことがあります。僕は写真に撮って読みましたけれども、使い道がなかったので放ってあります。

伊藤 木堂書簡集はこの間復刻になって、その後に集めたものは続という形で出版されましたよね。

櫻井 でも、あれは犬養が出したほうの書簡ばかりですよ。

伊藤 そうです。

櫻井 犬養宛の書簡が少しあるんですよ。

伊藤 それは記念館が持っているわけですか。

櫻井 ええ。矢野文雄、牧野伸顕、康有為、梁啓超、大石正巳、前島密などのものが巻物でありました。犬養が出したのものについてはその書簡集で見られますけれども、宛の書簡というのはそれほど今までなかったと思うんです。

伊藤 かなりの分量があるんですか。

櫻井 そんなに多くはないです。30通かそこらだったと思います。

これも結局、非政友会派系の動きを見る過程でいろいろ行ってみた時に見たものです。

次の玄洋社についてですが、福岡に玄洋社記念館があつて、これは内田良平の文書を編纂する過程で訪れました。古島一雄宛の書簡が大分ありまして、中野正剛から古島宛とか、萱野長知から古島宛、頭山満から古島宛とか、殆ど中国関係なんで

すけれども、面白い書簡が 14 通ぐらいありました。それで、しばらくの間、玄洋社の記念館からニュースを送ってきたんですけれども、最近送ってきてないので、その後資料館自体どうなったのかは分かりませんが、その書簡の中には、孫文の動静とか、本当にあったのかよく分からない、孫文が日本に対して 2000 万両の借款を申し込んだことに関連するようなものもありました。

伊藤 それは話題になりましたよね。

櫻井 それは三井文庫のものを使って紹介されたのですけれども、それに関連する書簡がありました。これは写真に撮って一応は読みやすいようにワープロ化してはあるんですが、断りなしに勝手に雑誌等に載せていいのかが分からないので載せてはいません。

次に横浜開港資料館ですが、私が最近知ったのは、稲生典太郎先生旧蔵の図書類が入ったんですね。一部分は以前に憲政記念館のほうに入ったわけです。その分が議会報告書集成（柏書房で出版）の元になったんですけれども、それ以外のものが開港資料館に入って、いま殆ど整理が終わっていると聞いています。稲生先生の集めたものですから純粋な図書といえないものがたくさんありまして、かなり面白いものがあります。

伊藤 それはパンフレット類とかそういうものですか。

櫻井 パンフレット類とかビラとかですね。それから、外交史料などが結構あります。

伊藤 それは文書類もあるわけですか。

櫻井 文書類に属するものがあります。詳しくは資料館の方にお聞きになることをお勧めします。

一つだけ、僕が見たもので面白かったものは、中島祐八という群馬県の代議士がいますが、彼が近衛篤磨に近いあたりから日露戦後にかけて政治的活動をしたときの小冊子・ビラ類があります。一部分は『大日本憲政史』とか『立憲民政党史』、それから『政友』などに引用されていますけれども、憲政本党や国民党のビラとかいろいろな声明書ですが、そういうものがそのままの形で残っています。内容は知っていましたが、初めて僕は実物を見ました。

それから、次の『内田良平文書』（芙蓉書房）というのは、これは一緒によく史料集を出していた波多野勝氏、それから黒沢文貴さん、斎藤聖二さんと一緒に編纂したものです。このグループでは、波多野さんが文書を見つけてきて、その他の人たちで整理をするという、殆どそういう形になっていたわけです。これは内田治さんから内田年恵さんに引き継がれたものです。以前この文書を使った人はたくさんいるわけなんですけれども、それが完全に公にされたことはなかったわけですが、網羅的にとにかく出してしまおうということで全 12 冊になったものです。しかし、

そこに収めた以外にも史料がたくさんありまして、それは分量の関係から収められなかったものや、他の史料集に載っているから収めなかったものや、内田自身が書いたものではないために収めなかったものもあります。そういうものが結構ありまして、これはいま常磐大学波多野研究室に置いてあります。慶応大学に入れる入るといいながら、それはなかなか実現していません。

伊藤 慶応ですか。

櫻井 内田が慶応の武道の講師をしていたということがあって、慶応の図書館に入れると言っていました。ただ、その事務自体が波多野氏が多忙なためか進んでいません。

その下に葛生修亮と記したのですが、これは内田文書をやっていて、以前『黒龍会関係資料集』（柏書房）というのを出したら、ある人がねじ込んで来まして、その人が自分も関わらせてくれという……まあ、運動関係の人なんですけれども、その人から期せずして教えられたものでした。内田の文書が、内田家に残る過程において、黒龍会を継いだ葛生が借り出していったものですね。それが亜細亜大学に入りまして、いまは太田耕造文庫の中に一緒にいるんですが、そこに内田文書の片割れがあったということです。

伊藤 葛生文書とっているけれども、これは内田文書なんですか。

櫻井 内田文書なんです。つまり、葛生さんが返さなかったわけですね。

伊藤 葛生さん自身の文書はないんですか。

櫻井 葛生の文書がどうなっているかはちょっと分かりません。

次の竹下勇文書も、これも2月に『海軍の外交官竹下勇日記』（芙蓉書房）として出しましたが文書自体は、いま半分ぐらい憲政資料室に入ってますが、これも20年ぐらい前に波多野勝氏が発掘してきて整理を始めたものです。そのうち日記の一部分だけは公刊できました。この人はポーツマス講和会議の海軍代表でしたし、その後、パリ講和のときもそうですし、国際連盟の創設のときの海軍代表でもありますから、海軍の中の会議屋だったわけですね。その人の回顧録とか、会議のときの様子を綴ったメモとか、そういうものが膨大にありました。そのうち約半分が憲政資料室に収められたわけです。残りはなぜ収められないのか僕はよく分からないのですけれども、まだ常磐大学にあります。

伊藤 それは常磐大学の所蔵なんですか。

櫻井 波多野研究室に置いてあります。そこには、竹下はのちに大日本少年団の総長などをやってまして、その関係のものなどもありますね。また、ポーツマス会議関係で重要な部分だけは多分、いちばん面白いところなんですけれども、それが竹下家にまだ残っているという話でして、集め方としては非常に良くないことになってしまっているわけです。

それから、長岡外史の文書も、その下の井口省吾文書もそうなんですけれども、日露戦争の関係で調べたもので、長岡外史文書は、もともとはどこにあったのかは知りませんが、現在は出身地である山口県下松の岡田憲佳さんという人が、長岡外史顕彰会というのを作ったんです。といっても本人1人だけなんですけれども（笑）、そこで持っていたものです。書簡の一部分については、憲政資料室にマイクロフィルムで入っています。防衛研究所図書館にあった頃もあるのですけれども、そこから引きあげられたということなんです。そのうち半分ぐらいを『長岡外史関係文書』（吉川弘文館発売）として出版しましたが、日露戦争以前の部分については、まだ全く手つかずのままになっています。目録については、私のインターネットのホームページで見られます。

その次の井口省吾文書は、僕らが見に行ったときには、自衛隊の板妻駐屯地にあったんです。富士山の下のところ、松井岩根大将の日記があったことで一時期注目されたところ。そこに資料館があって、そこに一時期預けられていたんです。それを借り出したわけですが、書簡類と文書類があって、それを整理して一部分は、これは斎藤さんが中心でしたけれども、『日露戦争と井口省吾』（原書房）という題で出版しました。それで、文書自体の多くは井口家にお返ししたということになっていて、いま現在は自衛隊のほうとは関係なくなっているはず。

次に黒岩周六日記というのは、これは東京市政の問題を非政友派の関連から扱っているときにたまたまあるのが分かって、黒岩さんのところに連絡がついたということでお伺いしたら、1年分（大正三～四年）の日記だけだったんです。それから万朝報社の末期の史料がほんの少しありました。小っちゃな日記ですが、それは起こしまして『紀尾井史学』（4号）に掲載し、今はインターネットで見られるようにしてあります。

次の毛利空桑文書というのは、これはまた変な文書でして、いま勤めている麗澤大学の創立者関係のものを調べているときにあることを知りました。漢学者の文書なんです、大分の非政友系の国家主義運動の関係で、熊本の紫溟会との関係で動いていた人の文書です。毛利空桑記念館というのが大分にありまして、管理は大分市ですので、大分市が所有しているものです。そのマイクロコピーは憲政資料室にも入っているんですね。入っていることは後で知ったのですが、なぜ入っているのかよく分かりません。

横尾輝吉文書と書いてあるのは、これは栃木県の県立文書館にあるんです。これは下野タイムスの社長をやっていた人の文書で、明治中頃から末期の非政友系の政治家の文書です。新聞社関係もあるんですけれども、栃木県と福島県の間道の問題とか、そういう問題についても大分書かれていたものがあります。栃木県史には、刊行後に文書館に入ったものだからあまり紹介されてはいないと思います。

伊藤 これは、僕がいちばん最初に坂野潤治と一緒に山奥の横尾の出身の益子町を訪ねて、もう一步というところでお婆さんに阻止されたという、そういう思い出深い文書なんです。この人は改進黨で、足尾問題で賛成派といいますか政府派の立場を取るものですから、それでちょっと嫌がっていたところもあるように思うんですね。それで県史で取ったというので、いまはどこにあるとおっしゃいました。

櫻井 栃木県の文書館にあります。そこで目録はとってありますので、手書きのでもしたけれども見ることができますね。

伊藤 あそこの家に行ったら蔵が3つか4つあって、そのお孫さんにあたる人は「駕籠だの何だのいろいろゴチャゴチャ入ってます」と言うから、僕はこういうカゴ（籠）かと思ったら担ぐ駕籠だったんで非常に驚いて（笑）。それで「どれぐらい分量があるんですか」と聞いたら、「いやあ、ちょっと想像がつかないぐらいあります」という話だったんですよ。だから、どれぐらい入ったものかちょっと分からないですね。

櫻井 そうですか、そういう経緯があったんですか。だから、地方の政治家のものというのは結構まだあると思うんですね。ただ、よく分からないことが多くて、たとえば、この前復刻された『政友特報』にしろ、従来は織物関係の家柄としか見られていなかったところにあつたわけですよ。だから、違う目で見るとまだあつたりするのかもしれない。

そのあとの広池千英旧蔵社会労働関係史料というのも、これもうちの大学の関係で、創立者なんですけれども、その人が昭和6年まで協調会にいたんですね。それで協調会関係の史料がありまして、法政大学大原社会問題研究所に本来はいかなきゃいけなかったものです。特にそのうちキッコーマン争議のものが半分ぐらいありまして、キッコーマン争議関係の協調会に引き継がれている資料というのはあまりないんですね。労働争議の大きさのわりにはなくて、むしろうちの大学にあつたということで、これは目録にして2年半ほど前に出しました。

伊藤 それは何ですか。

櫻井 これは『麗澤学際ジャーナル』という本学の雑誌です。この目録も急遽、2、3日前にインターネットに載せました。

伊藤 もうインターネットに入っているんですか。

櫻井 はい。所蔵雑誌以外の部分は載せました。

伊藤 この部分を含めてですか。

櫻井 はい。解題から全部入ってます。（注：同文書のマイクロフィルム化が完了し公開体制が整ったため、麗澤大学図書館のホームページにデータは移行された）

その他、訪れた史料館とか自分が見た文書についてですが、僕は憲政資料室の史料を多く使わせていただいて、他のものはそれほど積極的に見にいったわけではな

いので、あまり知っている情報はないのですけれども、たとえば、斎藤実記念館に、いまはどうなっているか知りませんが、未整理の書簡がたくさんあったような記憶があります。殆ど奥さん宛だという話を聞いたのですけれども。

伊藤 確か憲政であれば分けたんでしょう。

櫻井 憲政が持っていかなかった部分で……。

伊藤 だから、それを持っていかなかったというのは、要するに、プライベートのものは外したというふうに聞いておりますけれども。

櫻井 あれは奥さんのものですから。

伊藤 でも、必ずしもそれは厳密じゃないらしいので、本当は調査する必要があるんですよ。

伊藤 (光) 中を見てもいいんですよ。

櫻井 ええ。ただ、僕が行ったときには金網の箱の中にどんと積んでありました。

あそこは蔵書と雑誌が目録になっていますけれども、あの中にすごく面白いものが随分入っていて、それ自体1つの文書群ですよ。

古川 去年、学生と合宿でそこへ行って見ました。

櫻井 あそこにしかない雑誌って結構あると思うんですね。

古川 そうですね。パンフレットとかがたくさんありますからね。

伊藤 全部もらえばよかったのにな。

櫻井 あと同じ水沢市の後藤新平のほうなんですけれども、あそこにも後藤のマイクロフィルムと原本とどれぐらい違いがあるのかということで1度調べに行ったことがあって、そのときに僕は桂太郎を見て、もう一人が児玉源太郎を見たんですけれども、撮影漏れが大分ありますね。僕が見たものの中にはいくつか撮影漏れがありました。

伊藤 撮影漏れですかね。あれは目録は……

季武 目録は、全部で何通としかありませんよ。

櫻井 何通としか書いてありません。

伊藤 目録はあって、しかし、その目録の全てはマイクロになっているわけではない。

櫻井 いま残っている文書とマイクロを確かめると出入りがあるということです。

伊藤 目録ともチェックしないと駄目だと思うんですね。

櫻井 それから、いろんな経緯であの文書は動いているらしいから、その間にいろんなことがあったのかなと思います。

それで、間接的に聞く文書はいくつかあるんですが、実際に自分で見ていないものは言わないほうがいいので止めておきます。

次に蔵書というところに入りたいんですけれども、公立図書館もそうですし大学

図書館などに蔵書扱いで入っている文書というのは結構あって、意外と知ることが難しいように思います。たとえば、佐野市立図書館に、須永廉造だったと思うんですが、須永文庫というのがありまして、これは対外硬派関係のものなんですけれども、手書きの目録だったと思うけれども、目録を見たところ結構、いろんな対外硬派の史料がありました。

同じく、これは行って期待外れだったんですけども、福岡県立図書館に杉山文庫があって、杉山茂丸の趣味関係のものがたくさんあって、これはかなり有名ですよ。

それから東洋文化研究所なども、カードを繰っていると日本近代史関係の変な文書がポツポツとありますし、それは東洋文庫においても同じです。それから、明治新聞雑誌文庫の井手三郎の文書というか蔵書なんかも、そこにしかないものが含まれています。

そこに台湾法学院と書きましたけれども、この前ちょっと台湾に行ってきたまして、台湾大学の法学院の地下の書庫を見てきましたら、台北帝大のものを継承しているのですが、未整理の中にも何かいろんなものがありそうでした。

それから、早稲田大学も何かよく分からないところで、いろんなものがあるんですね。たとえば、これは実際見たことはないんですが、南大曹さんという書簡を集めるので有名だった人なんですけど、殆ど明治の文人の書簡が多いんですけども、その人が政治家の書簡も集めていて、その目録が早稲田大学の図書館の紀要に載っていたりしますし……

伊藤 何号ですか。

櫻井 1号ですね。

それから、これは整理をした人に聞いた話なんですけれども、あそこには渡辺幾治郎の集めたものとか、それから深谷博治さんが集めたものとかがありますけど、それが出るとか出ないとかということが常に言われてまして、その紹介を1度聞いたことがあります。だから、あそこも探すといういろいろ出てきそうなところだと思います。早稲田の人に1度お聞きになったらいいかと思います。

伊藤 誰がいちばんよく分かると思います。

櫻井 僕は文学部の院生の人に、去年ですけど1度話を聞いたことがあります。いろんな文書の整理を頼まれたということ。

伊藤 図書館の方ですか。

櫻井 ええ。それから、ここにいくつか史料の目録を持ってきたんですけども、中国に残っている宗方小太郎文書についてというようなものが紀要に載っていたり、それから、愛知大学に孫文と山田純三郎の史料があったり……

伊藤 それは何ですか。

櫻井 愛知大学国際問題研究所紀要ですね。

伊藤 それは何号ですか。

櫻井 97号です。

伊藤 愛知大学も行ってみななければいけないところの1つですね。

櫻井 それから、地方史における政治家文書として結構、県史レベルの史料集に、断片的ではなく、かなりの長さで史料(日記など)が載っている場合があって、たとえば、群馬県史の中にある高津仲次郎の日記などは、これは政友派の動きを知るのに非常に便利ですし、いろんな裏を取ったりすることも実際にできるような文書です。

それから、大宮市史の別巻2に、永田荘作という人に宛てた書簡がありました(大宮市、1995)。彼は自由民権運動から結局、改進黨系になってくる人でして、それから先ほどの足尾鉍毒関係の問題などにも尽力した人で、その人宛の書簡、島田三郎や改進黨系の人がたくさんありまして、これは最近のまとまったものでは、かなり情報を含んでいるものだと思えます。(注:僕が知ったのはある人から紹介されたからです)

それから地方史ですが、あんまり僕もやっていませんけれども、盲点になるのは、地方に住んでいた高級軍人と外交官ですね。調べに行かないわけです。まあ、とりあえず行くのは大地主と政治家の家ということで、そういう面とは違う形で、地方に引退した人のものというのは、地方史関係からはなかなか出てこない。それはひとつ問題かなと思いますね。たとえば田村怡与造のを調べる関係で山梨県の田村家へ行ったんですけれども、そこに行ったら史料はたくさんあったんですね。何があったかといったら近世の史料がたくさんあって、和宮降嫁の関係なども随分あったんですけれども、山梨県史をやっている人に聞いたら、そんなところには行ったことがないと言ったので、やはり軍人の家だからということで行かないんだと思うんですね。

こんなところが、それほど文書について知っているわけではないんですけれども、私が見てきた文書と、それから公開することになった文書です。僕らの文書の公開の仕方は、遺族の方に資金を援助していただくという形をとることが多くて、竹下勇の場合は、竹下家はその文書を憲政資料室に売って、そのお金をあててもらったわけです。それから井口省吾の場合は、やはり遺族の方が出してくれたわけです。長岡外史の場合はちょっと変わっていて、長岡外史顕彰会をやっている岡田さんというところが印刷屋さんだったんですね。それで本まで作ってくれたということになります。販売だけ吉川弘文館で扱ってもらったという形です。

伊藤 内田はどうしたんですか。

櫻井 これは出版社が引き受けてくれたというか、お金の問題は全然これは絡んで

いません。

伊藤 労働無料奉仕だということですか。

櫻井 そうですね。解題を書いて少しお金をもらったかな、わずかばかりですけれども出ましたね。

伊藤 スポンサーがつかないと本にするのはちょっと無理なんですね。

櫻井 文書を発掘してくると、どうしても出版にまでもっていかないと悪いような気がしてたいへんになってしまうわけで（笑）、重要な文書から出るわけではないということなんですね。その辺にちょっと疑問は持っているんですけども。

あとは、インターネットの話なんかをしていいでしょうか。

伊藤 そっちのほうにどんどん進んでください。

櫻井 私はあまり本格的にインターネットをやっているわけではなくて、ただ、いくつか自分が研究を進めてきた過程で、お台所仕事というんでしょうか、いろんな目録を作ったり、出稿する前段階としてワープロ化したりしたものが結構あったものですから、それをそのまま残しておくのはもったいないということで個人的に、まあ、誰が見るか分かりませんがという感じで、一応見せる体制にしておいたらいかなという思いでホームページを作ったわけです。麗澤大学は結構、情報教育を一生懸命やっています、かなり教員のほうにもサポートしてくれる体制ができていくということ……

伊藤 そのホームページは麗澤大学の中にあるわけですか。

櫻井 そうです。大学のホストコンピューター（サーバ）をある程度、1人々々の教員に割り振ってますので……

伊藤 その麗澤大学のホームページに入って、それであなたのホームページに入るということですか。

櫻井 そうということですね。櫻井ゼミでもいいし、日本近代研究というコーナーで史料を紹介しています（<http://www.reitaku-u.ac.jp/~rsakurai/index.html>）。史料と目録の紹介ですね。いま何があるかというと、先ほど述べた黒岩周六の日記ですね。

伊藤 それは本文ですか。

櫻井 本文です。それから又新会の会議録も本文です。井口省吾日記は掲載できなかった部分の陸軍大学の教頭時代の日記を……1度これも雑誌に載せたんですね。それを、雑誌に載せても殆ど紀要類ですから見てくれませんので全部載せたわけです。黒岩も又新会も井口もそうです。

インターネットのホームページに載せても、反応があるのかないのが全然分からなかったんですけども、ちょうど一昨日かその前の日ですけれども、文学関係の人が黒岩周六日記を見られて感想を書いてきて、それが初めての感想だったんで

すね。ヒット件数というか、どれぐらい接続されているかは大学のサーバーのほうで確認することができるんですけども、1ヵ月に多いときで200人ぐらい、少ないときで、まあ、最初のほうは少なかったですから、去年の8月は4件なんていうのがありますけれども、200人ぐらいは見ているんです。そのうちの半分以上は多分、学内だと思うんですね。それで、反応があったのはそれが初めてでしたが、その割には最近、人から見てますよなんて言われて、別に誰にも宣伝したわけではないんですけども、あらゆる検索のものには登録しませんでしたし、どこから伝わっていくのかなと不思議に思っていました。歴史学関係のリンクを集めたものをチラチラと見てみましたら紹介してありまして、そういうところが知られるようになったもとかないと思います。（注：最近キーワードを入れれば検索してくれるので、宣伝の必要はない）

リンクを張ること（いろいろな資料館とか研究機関とか情報機関につなげるようにすること）自体、僕はそれほど興味はなくて、というかインターネットのホームページを見ているとリンク集ばかりなんです。むしろ何か内容のあるものを公開するほうが重要なんだけれども、リンクを張ることに……もちろんそれがなくなかなか辿っていくことができないんですけども、どういう史料を提供できるかということが重要だと思うんですけども、それがなかなか進んでいないということを感じたので、じゃあ、自分は何ができるのかといたら、自分がこれまでやってきた研究の途中で作ったものなわけです。だから、蔵原惟郭を研究したときには著作目録とか、彼が出していた『新時代』という雑誌の索引を作りましたので、その目次をホームページに載せたり、それから、随分前から長島隆二を調べていたんですけども、その過程で著作目録を作ったので、それをそのまま載せたり、それから、加藤高明についてもこれからちょっとやらなきやいけないので、著作目録というか殆ど談話ですが、談話で雑誌記事になったものを、完璧はもちろん期し難いわけなんですけれども、そういうものを知っている範囲で載せるということをやってきたわけです。『伊集院彦吉関係文書』（芙蓉書房）を昨年出しましたけれども、その過程で書簡目録なんかを作りましたので、もちろん憲政資料室に行けば目録は見られるわけですが、それは何通としか記されておらず、また自分で作れば載せても構わないわけでしょうから載せてあるわけです。

それから、内容まで載せるといろいろ問題が出るので、触りの部分というか、なるべく著作権で厳密にいうと引っ掛かるのか引っ掛からないのか分からない程度に載せていこうということをしております。竹下勇の関係文書についても公刊したものに一部分だけ載せたものがあるんですけども、それ以外のものも全部載せたりしました。

ただ、それほど時間をかけているわけにはいきませんので、ホームページを作る

ときには、いちばん簡単な方法を使っています。殆ど字だけですし、実際に作ったのは、ワープロのテキスト・データを<PRE>と閉じるほうの</PRE>で囲んで、ある一定の形に流し込むという、そういうことしかやっていません。だから、加工するのがたいへんじゃないかと人々は言うのですけれども、そんなに加工に手間はかけない程度にやるということをしております。

僕はまだワープロ専用機を主に使用しています。シャープの書院という機種をここ17、8年、大学院を出てすぐの時期ですから、1983年からワープロを使ってまして（使用した機種は自家用以外を含めて7、8台）、データはテキストファイルに殆ど落として残しておいてあります。印字だけパソコンのレーザープリンターで出力しているという形で使用しています（コンバート用ソフトの印字機能を使用）。一方パソコン自体も10年ぐらい経験はありますけれども、殆ど書くのはワープロ、ワープロ専用機のほうが便利だと思っておりますので、ワープロを使いながらパソコンで保管したり、パソコンでするのは、データを分析したり、グラフを使ったりするときだけという形です。パソコンのデータの入力も全部ワープロでやっていきます。

伊藤 あなたのようなホームページというのは、他に見たことはありますか。

櫻井 他にというか、ゼミの内容とか自分の経歴とか業績を書いているのはいくらかでもあると思うんですけれども（笑）、個人的に史料を提供しているものは、それほど多くはないとは思いますが。（注：ここ1年でかなり状況は変化し、増えつつある）

伊藤 公の機関のホームページで、自分のところで持っている文書や何かの紹介をしているというのはどうですか。

櫻井 これはご存じでしょうけれども、立命館の図書館で西園寺公望の関係でパリ講和会議の資料を見ることが出来ますね。それから、台湾の中央研究院で中華民国史事日誌を見られるシステムがありました。

僕はあまり人のを覗くということは最近していないので、ちょっと思い出さないんですが、むしろ僕がいま便利だと思っているのは、漢字、異体字を検索するのとか、それから、J I S水準にない漢字をGIFイメージで提供してくれるとか……

伊藤 勝村さんのところでやっているんじゃないですか。

勝村 私のところもありますし、安岡さんという大型計算機センターのところもやっていますね。

櫻井 それから、日本の漢字と中国と台湾の漢字が違うわけなんですけれども、それを変換してくれるソフトを提供してくれるところとか、そういうところはありがたいなと思いました。だから、自分は普段専門的には使用しないんですけれども、専門以外のことで、あることが出来ないかなと思ったときにインターネットにつな

いで探してみると、結構便利なものがあると思います。

そこにPDFと書いたんですけども、最近、縦書きの文章も見られるようになってきたので、これはいい傾向だと。PDF——そのまま印刷したイメージが見られる形式の出力ファイル形式なんですけど、そういうものが流れているので、PDFを使ってくれると今後、いまいろんなものが電算になっているわけですし、その電算データを生かすことができる時代になってきたかなということを感じているわけです。つまり、僕はあまりリンクを張っていないんですけども、個人が提供できるものは何かということですね。少しずつでも自分がやってきた過程における何かを提供できるようなことをみなさんがやってくださればいいと思っています。

伊藤 その場合に、あなたがさっきちょっと触れました著作権の問題ですね。これはどういうことになるのかですね。

櫻井 売り物としてもう出しているものについては、著作権にあるいは版權に触れると思われまので中身は出してません。載せるとしても目次ぐらいのものですね。それは目次だけ載せておけば販売効果もあるわけですから（笑）、ある出版社も嫌だとは言いませんでしたから。それから、大学の紀要類に出したのもですね。それは著作権といっても本来ならば大学に属するのかな。

伊藤 そんなことはないと思いますよ。

櫻井 ですね。だから、そういうものをどんどん出して、資料類のものでも載せていけばいいなど。大学の紀要自体、各大学に配るという形ではなくて、インターネットで公開していったほうがいいんじゃないかと思っているんですけども。

梶田 たとえば、ホームページにお載せになられています論文とか、それから史料集などを我々が自分の論文で引用する場合、出典なんかはどうなるんだろうなんて、ちょっと気になるんですけども。

櫻井 一応もとに載っているものを書いておきましたので、それから引用したという形にしていただけであればいいんじゃないでしょうかね。（注：PDF形式だと出版形態と同じ物を掲げることが可能）

伊藤 要するに、純粹に電子化されたものだけで存在するというものはあまりないわけでしょう。

櫻井 たまにはありますけれども、著作目録なんかはそこにしか載っていないものを作ってますけどね。その場合は、ホームページのアドレスとかそういうものを書いていただければいいのですけれども、ただ、永遠にこれがあるのかと思うと、大学が変わったりすると削られてしまう可能性もあるとは思うんですけどね。ただ、動くことを予定して作っているわけではないので（笑）。

伊藤 梶田君、彼のところとリンクは張ってないでしょう。

梶田 張ってあるかもしれないし、鶴飼さんのところに入れてありますから、そこを辿ってはつながってますけど。

伊藤 麗澤大学のアドレスは何ですか。

櫻井 <http://www.reitaku-u.ac.jp> ですね。

伊藤 さて、お話はそんなところでしょうか。どうぞご質問してください。

櫻井 そういえば、この研究会もホームページがありましたね。

伊藤 いま作りかけているところですし、その情報収集の一環として今日のような会があるわけなんですけれども（笑）。

櫻井 昨日見ました。

伊藤 メンバーのほうもご覧に入れました。

季武 まだです。

伊藤 その著作権の問題ということがあって、目次を掲載していいものかどうかというのが非常に疑問なものですから、サークルみたいな形でグループを作って、パスワードで入っていくというふうな格好で、できるだけ目次も入れていこうということをいまやっているわけなんです。だから、櫻井さんも今日お話をいただいたので、メンバーになっていただいて、これからご協力いただこうと、こういう魂胆なんですよね。

季武 目録類の入力というのは、全部自分でやられたんですか。

櫻井 全部自分でやりました。人は使ったことはないですね。

季武 学生は使わないんですか。

櫻井 ゼミといっても毛の生えたようなゼミがあるだけです（笑）、殆ど自分のお台所仕事（研究の過程で発表を前提にしないで個人用に行った仕事）なんですね。

伊藤 梶田君、まだ目次は増えていませんか。

梶田 最近は増えていません。

伊藤 どうして増えていかないんだろう。だって、アルバイト代は随分出しているはずなんだけど（笑）、成果物がどうも梶田君のところには届かないという非常に奇妙なことになっているんですけど、これはどういうことなのかな。

梶田 コピーした目録だけでも相当その辺にあるような気がするんですが（笑）。

伊藤 いっぱいあるんですよ。とにかく相当量の目録、目次を集めたんですが、まだまだ集め足りないというのが現状ですね。

それから、いまおっしゃったような地方史の史料編ですね。あれの中に相当いろいろな史料群が入っているんですけども、その調査もこれからやらなければならない仕事の1つだと思います。茨城の風俗画報をやったりした人の日記なんていうのは、これは自由民権にも関わっている議員になった人ですけど、野口膳一日記が

茨城県史の史料編に収録されているんですね。そういった類のものはたくさんあちこちにあるように思うんですけども、丹念に見ていかないと見つからないし、多分、その家から県史が一部を借りて、そして史料編に入れてもとはそのままになっているというのを、今度はそこから辿っていく以外に方法はないわけですね。それも今年度の課題の1つだと思うんです。

ですから、いま僕らがやっているのは、何々文書はどこにあって、それで目録があるかないか。そして概要と目録と、目録があるものについては、その目録のところをクリックすると目録そのものが出てくる。こういう形で将来的にはずっとやっていこうと思っているんですが、その目録を出すことが著作権の問題と引っ掛かると非常に厄介だから、プライベートに私個人がやっているという格好で、私が我々という形になっていると。それをどんどん入れていきたいというのがいまの希望なんですね。それで、憲政のあれなんかでも、手書きじゃなくてワープロで打ち出しているやつなんかは、スキャナーでどんどん入れていけますから、これは作業をこれからやっていけばいいんですけども、手書きのやつは打ち込まなきゃならないし、ああいう手書きの目録にも著作権があるのかないのかですね。まあ、憲政史料室でOKをもらわないことにはまずいのかどうかですが、その辺がちょっと分からないので、うっかり接触して駄目と言われると、これはもう面倒なことになるので、どうやってその点をクリアしようかなというのが今年の課題なんです。

梶田 宮内庁書陵部の目録は、そのまま復刻するような出版社から出さしてくれとよく言われるんですけど、うちは駄目とっているんですね。それは著作権云々という問題以前の問題として、うちのほうで閲覧させる体制というのと関係がありまして、あの目録は間違いも多いし、あそこに載っているものでそのあと閲覧停止になったものも結構載っていて、そういうのを閲覧されても困るということで断ってましたね。ですから、著作権もそうですが、それを持っているところがどういう姿勢で公開しているかということですね。

伊藤 なるべく閲覧に来てもらいたくないという姿勢のところは、それはやっぱり拒否するだろうと思うんですよ。東大の法学部の法制資料センターなんかは多分、お断りしちゃえと、こういうことになるんじゃないかなと思うんですが、これはなんとかして外部から圧力を加えてやる以外手はないと思ってますが、本来そこがホームページを作るという姿勢を持ってれば、あなたのところでホームページが立ち上がるまでこっちで作りますから、それで作ったものは、あなたのほうのホームページができたならそっちへ移しますよと、こういうふうに言えばいいわけだと思っているんです。しかし、もともとそういうこともやるつもりもないところだと、これはちょっと手掛かりがないといえますか、あとは代行みたいなことなんですけれども、代行されて見にくる人が多くなったのでは仕事が増えてたまらないと

いう話になっちゃうと、もうデッドロックに乗り上げるということですね。

櫻井さん、これからどういうところを狙っていこうかなというふうに思っておられますか。

櫻井 僕個人としてはできることは限られていますから多分、まだいくつかやりかけていることがあるんですが、いま関東地方の選挙データ、県会選挙のデータをかなり集めてますので、それを公開していこうかなとは思っているんですけども、それが差し当たっての課題ですね。（注：1998年12月に一部をホームページ内で公開した）

伊藤 そのデータのもとはどうなんですか。

櫻井 新聞だったり、あるいは選挙録だったり、選挙のときの各県の……

伊藤 戦前の場合、必ずしも公の文書として出ているとは限らないでしょう。

櫻井 それは見られる範囲でやってますから、だから、完全には集まりませんけど。

伊藤 新聞のデータがどれほど信用できるのかということのも、ちょっとよく分からないんですが、まあ、なきに勝るといことだと思うんですが。

櫻井 完璧なものを作ろうなどとは最初から思ってなくて、ないよりあったほうがましかなという程度でやっているわけですから（笑）。

伊藤 それは確かにそうですね。

櫻井 主体は別にホームページを作ることにあるわけではないですから、その過程でたまたまできたいろんなデータを残しておきたいということでやっているだけで、それほど力も入れていないし、僕なんかは非常に軽い気持ちでやってたんですけども。

伊藤 今日のような会合の議事録も情報として入れていこうということですので、いずれこの速記ができあがりましたらお送りしますので、手を入れていただいて、いままで最初に有山さんにやっていただいてから今日で5回目になると思いますが、これから毎月いっぺんずつやっていって、それでも1年に12人の方からお話を伺えるわけですから随分、情報量は増えていくということですね。

櫻井 大概いま、論文を書くにしろ何にしろワープロで書いている人が多いわけですから、そのデータを残しておいて、いつか使えるようにしていくシステムを作ったほうがいいと思うんですね。本人の著作権がありますけれども。

季武 おそらく多くの方がそういうことを考えてやっているんじゃないかと思うんですけども。

伊藤 たとえば、これが実際に論文なら論文に近いものだと、もしかしたら本になったときにホームページで見られるじゃないかと。こういうことになると出版社との関係では、ちょっと具合が悪いわけですね。それで、出版してからそれが載って

いればやっぱり同じことですね。その辺が非常に厄介ですから、やはりデータのレベルでやらなきゃしょうがないんですけど、このデータもまたさっきおっしゃったように中身まで入れちゃえば、今度出版のほうに差し支えるということになるわけです。ですから僕は、さっきちょっと3段階みたいな話をしましたけれども、たとえば、犬養宛の誰々の書簡というところをクリックしますと画像が出てくる。できればそういうところまでいきたいと思っているわけですが、これはたいへんな労力とお金がかかるということで、相当大規模な機関を作る以外に手はないと思っているわけです。

櫻井 画像も時間がかかりますからね。

伊藤 画像もスピードの問題があるんですね。それだったら憲政まで行ってちゃんと見たほうが早いということもありうるかな。ただ、広島にいてというようなことになるのと、それでもそっちのほうが早いということはあると思うんですが。

櫻井 画像の場合は、テキストとして取り込めないですよ。

伊藤 特にご質問がなければ、今日はこんなところでよろしゅうございますでしょうか。次回のことですけれども、候補は上がっていたんですけど。

季武 塩崎さんとか。

伊藤 やっぱり塩崎君やりましょうよ。これはグローバルな話ですから、言われてもよく分からない何とかペーパーズとかいうのがやたらたくさん出てくると思いますが、国内もいろんなものを見ているんですよ。ですから、国内編、国外編というふうに2回ぐらい話を聞かないとちょっと無理かなと思いますが、それ優先でやりますか。それで、もし彼が駄目だったときに代わりの候補をちょっと考えたいんですが、さっきちょっとお話にありました波多野澄夫氏とか……

櫻井 僕が先ほど言ったのは波多野勝さんです。

伊藤 そうですか。では、波多野澄夫さんも1度聞かなきゃいけないということは前から話に出ているんですが、他にもいろいろ候補が出てましたね。

季武 お名前が出たのは、早稲田の佐藤能丸さんとか、柴田紳一氏とか……

伊藤 とりあえず塩崎さんに頼んでみて、具合が悪かったら、季武君と連絡取りながら別な人に頼むことにしておきたいと思います。

それでは、櫻井さん、どうもありがとうございました。（第6回終了）

追記 櫻井氏のホームページを下に掲載する。ご興味のある方は是非アクセスされたい。

